

原子力規制委員会委員退任記者会見録

- 日時：平成27年9月18日（金）16:00～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：中村佳代子委員

<退任挨拶>

○司会 それでは、予定の時間になりましたので、ただ今から中村委員の退任に当たりましての記者会見を始めたいと思います。

まず初めに、中村委員の方から一言よろしく願いいたします。

○中村委員 今日は3つのことを最初にお話しさせていただこうと思っています。

まず、一番最初に、本日、こうして無事に大過なくこの仕事を終えることができるのは、多くの方のお世話になったからだと思います。特に公用車の運転手さん、秘書さん、それから、ここのビルの守衛さんたち、毎日仕事の初めと終わりにいろいろな形でお心遣いや気配りを頂きました。この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。

2つ目は、一緒に仕事をしてきた規制庁の職員たちのことです。

私はみんなと一緒に仕事をしたこと、それぞれの実力とか、それぞれが成し遂げた成果に誇りを持っています。特に原子力災害時の医療体制を構築すること、原子力規制委員会や原子力規制庁がやってきたことを、日本語の翻訳ではなくて、国際的な視点で広報を続けてくれた人たち、この仕事はいずれもなかなか規制庁が原子力規制委員会の中で最初のもので、立ち上げたりすることにすごく苦労をしたものです。

でも、及ばずながら、みんなの力を結集して、少なくとも線路を敷くことはできました。私は、そういった人たちと一緒に仕事できたことをとても誇りに思いますし、今は線路が単線ですけれども、いずれ複線になり、複々線になることを確信しています。

3つ目は、原子力規制委員というよりは、むしろ、サイエンティストとして一言言わせていただきたいと思います。

私自身は、放射性物質の量を測定し、体の中の動態や、あるいは核医学という分野で数字を出し、それを報告し、そういう仕事をなりわいとしてきました。その数字は、よいペーパーを書き、よいジャーナルを出して、そして、専門職として、あるいは科学者として誇るべき仕事だと思ってきたからです。

この仕事について、こういう数字が、それだけではなくて、その一つ一つが生きていること、その値一つで政策が決まること、その値一つ一つで住民の人が帰るか帰らないかを決めること、その値一つ一つでその日一日が楽しいものになったり、憂鬱なものになったりする。数字は明らかに生きています。放射性物質の量や放射性物質に関しての内容を決めたりするこれからの重要なデータとか数値を出すときに、サイエンティス

トとしてお願いがあります。

その数値、数値は生きています。その数値、数値を出すことで、それがどういうふうに影響するかということを持って科学者は発信すべきだと思いますし、私もサイエンティストとして、そのことを胸に秘めてこれからも仕事を続けていきたいと思っています。

申し上げたい3つは、それで全てです。

<質疑応答>

○司会 ありがとうございます。

それでは、皆様からの質問をお受けしたいと思います。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。30分程度の時間の制約の中でございますので、できるだけ多くの方に御質問いただきたいと思います。質問は簡潔によりしくお願いいたします。質問のある方は手を挙げてください。

オイカワさん、どうぞ。

○記者 日経新聞のオイカワと申します。

今のお話とも関わってくるというか、話の中にもあったことなのですけれども、3年前に規制委員会が発足した当初というのは、福島の事故もありまして、原子力規制行政に対して非常に厳しい目が向けられていた中だったと思います。3年間委員を務めてこられて、田中委員長はよく信頼回復は途上だというようなことをおっしゃるのですけれども、中村委員御自身は、規制行政の信頼回復について、結構きたのではないかと言うのか、あるいはまだまだ足りないのか、その辺の評価というか、振り返られてどういう感想をお持ちでいらっしゃるか、お聞かせいただけますか。

○中村委員 信頼を得てくれるかどうかというのは、少なくとも私どもが判断をするようなことではなくて、向こうから聞いてくる相手、相談する相手が多くなればなるほど、いろいろな形で信頼が築かれたのだと思います。そういう相談の回数とか、質問の回数とか、頼ってくれる回数とかいったようなものが一番最初のときよりは少しは増えてはいるかもしれません。

ですけれども、やはりまだまだです。この仕事を始めるに当たって、私たちは福島の人たち、あるいは事故を起こしたところとか、そこから逃げられた方々が自分たちで立ち上がるときに、ちょっと振り返って、これでいいよねという肩を押してあげる役目が私たちの役だと思っていますけれども、まだまだその人たちが振り返ってくれる状態がないということは、なかなかまだ信頼が回復されていないのではないかなというふうに感じています。

○記者 先ほど線路に例えられて、それはお話のあったいろいろな、どちらかという個別の業務に関して、線路を敷くことができたということをおっしゃっていたかと思うのですけれども、まだ信頼は回復できていないと。ただし、その道筋みたいなものはある

程度築くことが、難しいかもしれませんが、そういう御認識はおありですか。

○中村委員 私よりも規制庁の職員そのものにみんなが信頼を寄せてくれるように、あるいはそうなるように一緒に仕事をしてきたつもりです。ですから、少なくともそこに問合せがある以上は、パブコメの意見等も参考にして、後退はしていないと思います。少しは前進はしていると信じたいと思います。そうでないと、なかなか前に進めないのです。

○司会 他にはいかがでしょうか。どうぞ。

○記者 フリーランスのキノと申しますが、先ほどのお話で数字は生きているというお話があったのですけれども、その数字の意味を捉えるという部分で、例えば、中村委員が以前取りまとめていた海洋モニタリングに関する検討会があったと思うのですが、あれは東電が発表したデータの信頼性を検証するという意味でも一定の意義があったのかなど。それから、海の状況を確認する意味でと思うのですが、これが昨年1月27日を最後に開催されていなくて、開催しなかったのはどのような理由だったのか、大分前の話なのですけれども、ちょっと教えていただけないかなと思うのと、それから、その間、海の状況に関してどのようにお考えなのかなというのをちょっと教えていただけないでしょうか。

○中村委員 まず、海洋モニタリングの方は、私どもは1Fのこと、あるいは総合モニタリング計画というところで原子力規制庁や規制委員会が関与しています。その段階でもしもこういったようなモニタリング方法、あるいはこういったような測り方、あるいはこういう場所で測ったらいいのではないかということ、御意見を伺いながら、あの海洋モニタリング検討会というのは進めていきました。

今現在の段階では、先生方、そこで参加してくださった方々の御意見を一応守っておりますので、特にそのリクエストがあるというわけではなく、ただ私たちはひたすら海洋の状態を週一で「シーエリアモニタリング (Sea Area Monitoring)」というのも出しているのは御存知ですよね。ですから、ああいうところで見させていただいているし、結果を公表して、そして、それそのものもIAEAとか、いろいろな形で発信させていただき、IAEAの環境研究所の方からも、日本のデータとか信頼性について裏打ちをしていただきましたので、少なくともこういう状況はずっと続けていく。ずっと続けていくことが非常に重要だと思いますので、その段階で海がコントロールとか、コントロールされるとかというのではなくて、とにかく私たちは事実を伝えていくことをまず第一と考えています。

○記者 確認なのですけれども、そうすると、モニタリングの検討会自体は取りあえず一定の役割を終えて、もう継続する必要がなくなったという認識でよろしいですか。

○中村委員 検討会は特にクローズドの宣言をしていません。ですから、検討会は、その要時にもし必要とあればいろいろな形で、あれはどちらかということ、1Fの監視とか、そういうところといろいろ有機的に、総合的に見たりすることが必要ですので、そちらか

ら要請があったり、あるいはまた要請の内容が違うものであれば、そのことについての有識者、あるいは専門家の方を交えて検討会を広げたり、あるいは狭めたり、適時開催していくことになると思います。今現在はそれを開く段階になっていないというだけの問題です。

○司会 他にいらっしゃいますでしょうか。

クマイさん、どうぞ。

○記者 朝日新聞のクマイと申します。

ちょっと抽象的で恐縮なのですが、この3年間で一番印象深かったことと、あと、課題解決の途中で次の伴委員に引き継がざるを得なかったことというか、やり残したことというのがあれば、ちょっと教えていただければと思います。

○中村委員 ごめんなさい。最初の方は何でしたか。

○記者 3年間で一番印象深かったことというのはございますでしょうか。

○中村委員 3年間で一番印象深かったと、まだ思い浸る時間になっていないので、ごめんなさい。全てが印象深いし、ただ、懐かしむ時期ではまだないので、まだ今日も仕事なので。

それから、今、次の委員に引き継ぐということですが、私自身は引き継ぎというものは全く考えていません。引き継ぐということではなくて、また新しい委員は新しい委員として、新しい目で御覧になればいいし、キャリアも違うし、もちろん年齢も違います。ですから、特に引き継いだということは全くないし、やり残したということになれば、それは全てがやり残していますよね。だって、今さっきの御質問にあったように、信頼だって全部が回復されていないわけですから、だから、それは規制委員としてではなくて、規制委員会としてみんなまだやり残したというよりも、まだ問題は残っているという表現の方が正しいと思います。

○司会 他にございますか。

それでは、トリイさん、どうぞ。

○記者 毎日新聞のトリイと申します。

今の質問とも関連するのですが、規制委員会の今後の課題、何かお感じになっていることがあれば教えていただきたいのが1点と、あと、伴委員に期待することというのを2点教えてください。

○中村委員 規制委員会としてというのは、なかなか難しいですね。できるだけ規制委員会としてというか、私は別に代表者ではないので、そういう形でもないし、それから、次の方の伴委員に期待するなんていうのは、とてもではないですが、おこがましくて、そんな期待もするわけではなくて、御自分のおやりになりたいことをやられるのが一番いいことだと思います。

○司会 それでは、タケオカさん。

○記者 共同通信のタケオカと申します。

冒頭、複線はこれからというなお話のございましたけれども、原子力防災の分野でまだやるべきこととして残っている課題というのは、どういうふうにお考えになっていますでしょうか。

○中村委員 原子力防災というか、こちらで仕事をさせていただいたときに一番難しかったのは、福島原発事故を受けて、そういう事故の被害者という形の方と、それから、それを見据えながら防災計画をつけていくという、このギャップ感はあると思うのですね。

一番難しいのは、やはり放射線に対してとか、被ばくをすとか、できるだけこの「被ばくをす」とか「汚染をす」という言葉は避けるようにはしているのですが、できるだけその間のリスクコミュニケーションと、簡単に言ってしまうとリスクミナなのですが、そうではなくて、お互いの信頼を勝ち得ながら、片方で防災計画、内閣府の防災にも通じることですけれども、それから、福島の事故の後の健康管理とか、そういったようなことを同じ目線で見えていくというのは非常に難しいので、その折り合いをつけるというところ、あるいは説明の仕方、あるいはどうやったら分かっていたかといったようなことが一番難しいと思いますし、これからも残っていることだと思います。

○記者 あともう一点だけ、原子力災害対策指針を作って、以前の防災指針に比べると大分強化されたと思うのですが、一方で、なかなか立地周辺自治体の住民の方々の事故時に避難できるのかという不安がなかなか拭えない状況だと思うのですが、規制委員会として、国としてまだ足りなかったことがあったとすれば、どんなことだとお考えでしょうか。

○中村委員 足りないというよりも、まだまだこれから話をしていかなければいけないというのは、やはり放射線に対してどういうふうに防護をすとか、放射線に対してうまく理解していただいて、私たちがこの防災で一番気を付けなければいけないのは、放射線というものにとらわれてしまって逃げたりすること、あるいは走ったりすること、あるいはパニックに陥ったりして、それ以上の障害とか、けがが起これるということをしてできるだけ避けなければいけないと思っています。

ですから、これから先はそういった防災とか、放射線に対する防護という枠組みではなくて、原子力災害が起こったときに、どういうふうに対処をして、どういうふうに事前にきちんと理解をしてもらうかということが最大の課題だと思います。どうしても災害が終わってしまうと忘れてしまってしまうので、そこを時間をかけてみんなに分かってもらうようにしたいと考えています。

○司会 では、どうぞ。

○記者 電気新聞のイナモトと申します。

今後の御予定を伺いたいのですけれども、退任後の御予定ですね、何か今の時点で決まっていることがあれば教えていただきたいのと、あと、大変卑近な話で恐縮なのですが、委員のお姿を定例会合等々で拝見していたら、夏場、冬場を通じてネクタイ姿を通していらっしゃるのですけれども、そこに何か込めたメッセージですとか、思い入れというものがおありだったのか、以上2点伺います。

○中村委員 離職をした後のことは全く考えていませんし、予定もありません。少なくとも大学の学部を出てから今まで走り続けて、特に最後の3年間はラストスパートというか、すごくあれなので、もしできればちょっとお時間を頂きたいというのが本音です。

ネクタイは、どうしましょう。みんなは、規制庁の職員は実は知っているのですけれども、話してもいいかな。非常に個人的なことです。

この仕事は、自分の両親のくれた環境で、この仕事が回ってきました。そういうことも含めて、私自身は自分の父と母と一緒に仕事をしていると思ってこの仕事を受けました。ネクタイは父のネクタイです。それがゆえにずっとネクタイを続けました。

○記者 ありがとうございます。

○司会 他にはございませんでしょうか。

シゲタさん、どうぞ。

○記者 NHKのシゲタと申します。

先生は福島の住民の帰還等をいろいろ取り組まれてきたと思うのですけれども、率直に、この3年間過ごしてみて、今、福島の方々に一言言うのであれば、一言お願いできますか。

○中村委員 一番最初にこの仕事についたときに、先ほどお話をしたとおり、福島の人たちが、あるいは北茨城の人たちが自立をして、そのときに振り返って大丈夫だという背中を押す仕事をしたいと思っていました。でも、意外とそう簡単ではないし、おそらく福島の人から見ると、この3年は随分長いように感じていらっしゃると思います。力が足りなかったことは素直に認めざるを得ないと思います。

でも、今回、帰還をする、いろいろな形でもとに戻るといふうに決められた方々、あるいはとどまるといった方々、それぞれの決定を私は心から尊重しますし、もしできることがあるならば、もしちょっとでも不安があるならば、もし誰かの助けが必要であるならば、いくらでも相談に乗りますし、これから先もいろいろな形で後ろで、いつか振り返ったときに、その振り返るのが必要がない自立するまで何とか応援していきたいと思います。3年間期待されたような仕事にはなっていなかったかもしれないけれども、いつも応援している。何かの形で支援をさせていただきたいと思っています。

○司会 他にはよろしいでしょうか。

では、どうぞ。

○記者 たびたびすみません、フリーランスのキノですが、今のお話の中で、福島の人たちとか北茨城の人たちに、大丈夫だと背中を押すような仕事というようなお話があったのですけれども、大丈夫だと背中を押すという、その意味をもう一度確認できますでしょうか。

○中村委員 大丈夫と背中を押すというのは、大丈夫ですかと相談を何度もこの仕事につく前に受けました、いろいろな形で。何か相談したいとき、ちょっと背中を押してもらいたいときというのはありますでしょう。そういうときに、自分の結論や自分の出した決定が間違っていないよという、そういう意味の大丈夫。健康とか、そういうのではなくて、その結論を、決意を、勇気を持って出したことを、ちょっと背中を押すことによってとても気分が楽になるのであれば、その人を応援することができるかなと思っているのです。

○司会 他にはよろしいでしょうか。

それでは、これで会見を終わりにしたいと思います。お疲れさまでございました。

—了—